★日本語日本文学科に進まれる皆さんへ　★

下に挙げたのは、教員一人一人がお薦めする一冊の本とそれに関する短いコメントです。入学までの間に、皆さんが一冊でも手にとってみて読んでくれたら嬉しいなという気持ちをこめて作りました。

☆ 大谷雅夫著『万葉集に出会う』

（岩波新書、２０２１年）

８世紀の日本にはまだ平仮名が存在せず、歌も全て漢字で記されました。そのため後世の読者が『万葉集』の歌を理解するためには、何よりもまず歌の訓よみを確定させなければなりません。それは即ち、確かな解釈を導くことと直結します。しかし意外なことに、「東（ひむかし）の野に炎（かぎろひ）の立つ見えてかへり見すれば月傾（かたぶ）きぬ（原文は東野炎立所見而反見為者月西渡）」（巻一・48）という、柿本人麻呂の有名な歌ですら、本当にその訓みでよいのか、実はまだ定まっていないのです。本書は、こうした問題に正面から取り組んだ著者が、その成果をわかりやすく新書にまとめたものです。緻密な検証によってことばと向き合い、謎を紐解いて行く展開は、読者を期待させて、裏切りません。古典を読むとはどういうことか、その原点を改めて考えさせる一冊です。さて、「東の…」の歌は、一体どのように訓めるでしょうか？

（上代文学・岩田芳子）

☆ 清水好子『源氏の女君―増補版』

（はなわ新書、１９６７年）

本書は、『源氏物語』に登場する女君たち――藤壺、紫の上、宇治大君・中君、浮舟、脇役としての侍女たち――に加え、浮舟と深く関わる横川の僧都を取り上げ論評したものです。人物を軸にした記述ながら、単なる人物やあらすじの紹介にとどまらず、著者の研究成果で、今では定説となっている事柄――恋する作中人物たちが一対の男女として向き合うときに「おとこ」「おんな」と呼称されること、仏道に心を寄せながら、女性に恋する両面性を持つ薫の物語史上未曾有の人物造型――などについても丁寧に説明されます。　　文体・場面・人物の心情の分析や、平安貴族たちの社会通念についての解説は、初学者にぜひ読んで欲しい行き届いたものであると同時に、研究者にも今なお多くの示唆を与え続けています。

著者は戦後の源氏研究をリードした、女性研究者の草分け的存在。名文家としても知られ、本書も入門書を越えて「作品」と呼んで良いような、心揺さぶられる魅力的な文体で綴られています。

（中古文学・林　悠子）

☆ 久保田淳『久保田淳座談集　心あひの風 ―いま、古典を読む』

（笠間書院、２００４年）

古典文学研究の第一人者である久保田淳氏が聞き手となり、秋山虔、ドナルド・キーン、俵万智、金子兜太&佐佐木行綱、丸谷才一、竹西寛子、田辺聖子&冷泉貴美子、岡井隆という豪華なゲストを迎えて古典文学の魅力について腹蔵なく語り合うという、なんとも贅沢な書物です。

「いま、古典を読む」ことの楽しさが、それぞれの関心に応じた切り口から語られていますが、決して「お行儀の良い」座談集ではありません。歌人や作家など実作に携わっている人も多いため、彼ら自身の文学の営みとも重ねあわせた本音のコメントが飛び出して実に愉快です。古典文学はこんなツッコミを入れながら読んでもいいのか！と目から鱗が落ちることでしょう。巻末には詩歌索引もあり、座談会中で引用された詩歌の出典がわかるようになっていますので、そこからさらに古典の世界に足を踏み入れていくのも一興。至れり尽くせりの一冊です。

（中世文学・石井倫子）

☆ 辻惟雄『奇想の系譜』

（ちくま学芸文庫、２００４年）

江戸時代の文芸の魅力については、絵画との関係で論じられることが多くなったが、それは最近になってのことである。本書が出版された七十年代には、そうした発想も少なく、本書は驚きをもって迎えられた。本書は、江戸時代の面白さと奥の深さを絵画作品を順に取り上げることで語る書物である。岩佐又兵衛、狩野山雪、伊藤若冲、歌川国芳など、近年になって評価されている画家であるが、この書物が出るまでは無名であった。本書はこれらの人々を世に送り出したといってよく、彼らの魅力を余すことなく描ききっている。その魅力は、あるいは妖艶、あるいは怪奇、あるいは不思議と評してよいが、それらを「奇想」の一語で切ったあたりも清新である。あわせて江戸文芸の本質や、それに潜む人間の内実までをうかがうことができる。それでいて、筆致は軽く、手軽に楽しむことのできる書物である。

（近世文学・福田安典）

☆ ピエール・バイヤール『読んでいない本について堂々と語る方法』

（ちくま学芸文庫、２０１６年）

古典的作品にしろ、いま話題の作品にしろ、読まなくてはいけない作品が多過ぎる――これはとても普遍的な悩み。芥川龍之介「侏儒の言葉」にもありますが、生きるということは日常の些事から成り立っていて、とてもじゃないが時間が足りない。なのに、大学に入るとさらに、この本を読め、この本がおすすめだと、次々とリストが膨らんでゆく。さてさて、どうするか。最善の対処法は「読んだふりをすること」というのがこの書籍の主張するところ。しかし、つじつまあわせにつまらない嘘をついたことがある人はお分かりでしょうが、「ふり＝嘘」を貫くのはなかなか大変。ぼんやり読むよりは、読んでいないのに読んだかのようにふるまうほうがよほど大変。その大変さの中に、かえって対象に対する深い理解が生

じるというわけです。さて、皆さん、これからは、「読んでません」などと芸のない言葉は禁句です。そして、もし、ふりをするのが面倒くさければ……、まあ、ちゃんと読むしかありませんね。

（近現代文学・山口俊雄）

☆ ちくま文庫版『〇〇全集　１』（筑摩書房）

春休み中におすすめしたいのは〈その先へ〉の読書です。何を読むかもさることながら、どのように読むかを、意識してみてください。

何を読むか決めがたいという方には、ちくま文庫版『〇〇全集』（※〇〇は作家名）第１巻が、お得でとてもおすすめです。賢治、鷗外、芥川、中島敦……いろいろあります。気になるものを、どれでも一冊お手にお取りください。

仮に、『森鷗外全集１』（ちくま文庫）を開いてみます。読んだこと、見たことのあるタイトルとともに、『魔睡』など、見たことのないタイトルが並びます。短篇が多いので、どこから読んでもかまいません。全部読む必要もありません。できればここでは、出会う機会のなかったタイトルを選び、新しい読書体験を始めてみましょう。たとえば『大発見』。自然科学者の「僕」は、大真面目で〈発見の話〉をしています。ところが「僕」が披露するのは、こんなことが小説になるのかと、思わずあきれ、苦笑が漏れだすような珍妙な発見です。なぜこんなエピソードを語り、それに「大発見」などと大げさなタイトルをつけ、この時代に発表するのか。読書体験を〈感想〉に変えるのではなく、**〈問〉に転換**してみてください。それが〈大学での読書〉の入り口です。

（近現代文学・渡部麻実）

☆ 金水敏『ヴァーチャル日本語　役割語の謎』

（岩波書店、２００３年）

「ロンドンに着いたとたん、わしがおるべき場所は出発してきた所だったとはっきり気がついたんじゃ。」この文の話し手がどんな人物か想像してみてください。No sooner had I reached London than it became clear to me that the place I should be was the one I had just left.の翻訳なのですが、いかがでしょうか。関西の男性のことばと思ったでしょうか。これば、『ハリー・ポッター』の魔法学校のダンブルドア校長のことばです。「わし」「おる」「じゃ」は、私たちが持っている「教養ある老人」のことばに対するプロトタイプ・イメージを利用するために使われています。この本は、私たちには、ある属性を持つ人物が用いることばに対する共通認識が出来上がっていて、それを抵抗なく受け入れてしまうことに気づかせてくれます。小説や物語のことばは、日常生活で使われることばそのものではないのかもしれません。日本語日本文学科に入学し、日本文学・日本語研究の世界に入る前に是非読んでおいてほしい一冊です。

（日本語学・坂本清恵）

☆　広瀬友紀『ちいさい言語学者の冒険』

（岩波書店、２０１７年）

本書のタイトルにもなっている「ちいさい言語学者」は、ことばを習得する旅の真っただ中にいる子どもたちのことを指しています。「「は」にテンテンつけたら何ていう？」と聞かれて「わからない」と答える背景に何があるのか、寝ている子を起こすときに「起きさせる」と発話した子どもの頭の中ではどのような規則が働いているのか……日本語を母語として育った大人からすれば、見過ごしてしまうような、あるいは「誤り」と思われるようなことばのあれこれを、著者はじっくり観察し、言語学の知識に基づいて説明を試みます。みなさんも読み進めていくうちに、登場する子どもの発話をとびこえ、各自の体験から、「そういえば、あれも規則性があるのかも」「歴史的に見るとどんな変化があったのかな」といったアイデアや疑問がどんどん浮かんでくるかもしれません。これから大学で学ぶみなさんにとって、いつのまにか使いこなせている「ことば」の仕組みを再考することが、身の回りの「当たり前」に疑問を持つきっかけになればと思います。

（日本語学・村山実和子）

☆　白井恭弘『外国語学習に成功する人、しない人―第二言語習得論への招待』

（岩波書店、２００４年）

現在、国内外でたくさんの人が日本語を学習しています。その中には日本語学習に成功する人もいるし、いない人もいます。その差はどこにあるのでしょうか。この本では「外国語は聞くだけで身に付くのか」や「文法知識は役に立つのか」など、これまで常識だと考えられてきたことに疑問を持ち、その答えを探ることで成功する人としない人の差を見つけようとしています。大学で学ぶということは、このような考え方や方法を身につけることです。常識だと思われていたこと、誰もが気づかなかったことに疑問を感じて、その答えを自分で探す方法を身につけることが大学での学びです。みなさんもこの本を読んで、自分の学習方法がこれまでの学習経験や常識にどれほど影響されているかを見つめ直してみてください。同時に、大学での外国語学習に成功する方法を考えてもらえればと思います。

（日本語教育学・衣川隆生）

☆　荒川洋平『日本語という外国語』

（講談社現代新書、２００９年）

外国語というと英語や中国語、韓国語などを思い浮かべるかもしれませんが、外国人にとって日本語は外国語の１つです。筆者は長年、外国人に日本語を教えてきて、その経験を通して、本書で日本語を捉えなおしてみようとしています。日本語には難しい面もあれば、やさしい面もあります。例えば、外国人にとって漢字や敬語は難しいかもしれませんが、発音やイントネーション、文法面ではどうでしょうか。日本語には、日本人の私たちが自覚していない「魅力」や「個性」もあるようです。今までみなさんが見ていなかった「新しい日本語の世界」を感じ、味わうきっかけにしていただけたらと思います。

（日本語教育学・濱川祐紀代）

☆ 大串夏身『レファレンスと図書館―ある図書館司書の日記』

（皓星社、２０１９年）

東京都立中央図書館のレファレンスサービス担当司書としての著者の体験を描いた本です。レファレンスサービスとは、図書館員が対面あるいは電話などで、利用者が求める情報や資料を提供したり、その探し方を案内したりするサービスのことです。みなさんの町の公共図書館でも、必ずそのようなサービスをしているのですが、実際に図書館員に相談してみた経験のある人は少ないのではないでしょうか？
本書では、さまざまな利用者からさまざまなタイプの相談が寄せられ、著者が悪戦苦闘する様子がリアルに描かれています。一九八〇年代後半の話なのですが、質問の種類や、調査に当たって気を付けるべき点などは，それほど大きく変化していないように思います。図書館利用者としては、「こんなことも聞いていいんだ！」そして図書館司書を目指す方にとっては、「こんなふうに調べるのか！」という発見につながります。

（図書館情報学・木村麻衣子）

☆ 江上波夫編『東洋学の系譜』（大修館書店、１９９２年）
『東洋学の系譜』第二集（１９９４年）

本書には、明治期以降日本の東洋学を築き上げてきた研究者たちの足跡が、簡潔にまとめられています。中国、朝鮮半島、中央アジア、インド、中東に至る様々な分野で、日本の研究者は時に中国における研究をけん引しながら、業績を積み重ねてきました。本書をひもとくと、例えば中国関係では、日本の研究者たちがそれぞれ実に個性的で、独創的に中国の文学や歴史、思想を中国だけでなく周辺国にまで研究領域を広げて研究をしてきたことが分かります。世界で日本ほど緻密に深く中国を研究してきた国はありません。今は簡単に情報が手に入る時代になりましたが、本書に紹介されている研究者は長い年月をかけて原資料にあたり、好奇心の赴くままに様々な土地を訪れ、現地での実体験を経て、自身の研究を豊かなものにしてきました。皆さんも大学に入ったらいろいろな国々にも関心を向けて、視野を広げて下さい。そして本書の中で紹介されている興味を感じた研究者の書を読んで、東洋の文化と学問の魅力を味わって下さい。

（中国文学･思想・吉田薫）

★また、以下には古典と近代の有名な作品を書名のみ（近代は著者名も）少しずつ挙げておきました。

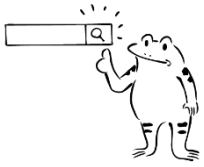
古事記、万葉集、竹取物語、土佐日記、伊勢物語、古今和歌集、源氏物語、枕草子、更級日記、和泉式部日記、徒然草、宇治拾遺物語、平家物語、好色一代男、雨月物語、おくのほそ道

⇒（文庫本がいろいろあるし、新編日本古典文学全集〈小学館〉は注や訳が充実していて便利）

森鷗外「阿部一族」、夏目漱石「こころ」「坊ちゃん」、樋口一葉「たけくらべ」、泉鏡花「高野聖」、島崎藤村「破戒」、志賀直哉「暗夜行路」、谷崎潤一郎「細雪」、芥川龍之介「地獄変」、宮沢賢治「銀河鉄道の夜」、川端康成「雪国」、三島由紀夫「仮面の告白」、高村光太郎「智恵子抄」、与謝野晶子「みだれ髪」

⇒（どれも手軽に文庫本で買える）

★日本語日本文学科では、学科のリアルを各種 SNS で配信しています。ぜひご覧ください。



Facebook　　X　　Instagram

公式ブログ　https://mcm-www.jwu.ac.jp/~nichibun/blog/

★それでは、４月にお目にかかりましょう。その時を楽しみにしています。

日本女子大学文学部日本語日本文学科教員一同